

遺産登録にはいい材料にはならない。

だが、プロジェクトの進展によって緑の回廊がどんどん広がつていけば、「行き場を失つだらう」と、森の復元の過程で撤去せざるを得なくなる局面もあり得ることを示唆した。

講演の後、筑紫氏が進行役となり、

山田壽夫九州森林管理局長、河野耕三、

郷田美紀子と、プロジェクトについて語り合つてトークライブとなつた。

河野は綾の昭葉樹林にかかわり続

く自らの姿勢を「人間本位の価値判断

で森を金に換算し、価値がないと決めた雑木には見向きもしないやり方に疑問を感じたことが原点」と語り、美紀子は「森林管理局と県、町、自然保護協会と手を携え、本当の意味の自然と向き合えるようになれて嬉しい」と市民の立場で官と協働することへの感謝を述べた。また、プロジェクトを具体的に進めるにあたり予算をだれがどう負担するのかという筑紫氏の問い合わせに、山田局長は「自然の力を借り、ゆく

り取り組んでいくプロジェクトなので

早急に答えを出すものではありません。

市民団体、民間団体などに呼びかけ、いろいろなかたちでの参加を期待しま

す」と答えた。

この筑紫氏の問いかけには実は大き

な意味がある。一つの事業を共同で実

施する際、一般的には資金を多く出

ほど発言権も強くなるが、仮に官の發

言権が大きくなつた場合、民間として

はやりにくい面が出てくるかも知れな

い。

反対に、極端に言えば、一企業が目立つた出資をして利益誘導を図ることもあり得る。そうした不公正や団体間の対立を防ぐためにどんな用意が必要なのか議論の必要があるということなのだ。

さらに筑紫氏は、近い将来、九電がこのプロジェクトへの参加を申し入れる可能性もあり、多額の資金提供があつた場合どんな対応をすべきかが問題となるだろうとも指摘した。實際、九

電はこのプロジェクトに関心を持つて

おり、現在、どのような形で参加すべ

きかを内部的に検討しているという。

てはの森の会の一員として九電の動向に注目する小川は次のように話す。

「仮に九電がプロジェクトに参加するにしても、無条件にどうぞというのではなく、一定の条件をこちらから提示

した上で、ということになるでしょう。

たとえば対象区域にかかる鉄塔は九電

が責任を持って撤去すること（時期は

第三者機関が検討）を協定書で確認す

るのです。そのためにもプロジェクト

内部での議論をきちんとしなければな

らないでしょう。こうした議論をする

上で、今回の筑紫さんの評価はベース

になるはずです」

動き始めた壮大なプロジェクトにはいくつもの課題があると見ていいだろう。けれど、筑紫氏が言うように、「楽しい議論の中から」夢の実現を目指して欲しいと思わずにはいられない。

(文中敬称略)★

ルポ インドネシア レンバタ島の漁師たち

四百年の古法で捕るクジラやイルカ 悠久の時を生き、一瞬の死闘に賭ける

ルボライター 近藤雄生

一匹でも多い捕獲をめざして近代の漁法は日進月歩してきたが、ここインドネシア東部のレンバタ島の村では、いまも先祖伝来四〇〇年の漁法で、漁師たちは、海へ向かう。しかし彼らには、近代人にない強勁で一途な生きざまがあった。

「至福の瞬間」を求めて

午前八時半、まだ朝とはいえ日差しはとてもなく強かつた。その下で七人の男が乗つた小さな木船は、静かに一定のリズムで揺れ続けている。全てを波にゆ



イルカの群れの中に入していく船

「望星」(東海大学出版会) 2006.5月号

だね、ただ揺られ流されるままとなつた。その船の中で、男たちは何も話さずただじっと待ち続けた。さあ、姿を見せてみろ……と。

——インドネシア東部、レンバタ島のラマレラという小さな村にぼくはいた。

四〇〇年前とほとんど変わらぬ方法で今も捕鯨を続いているというその村で、一週間ほどクジラが現れるのを待っていた。竹でできた鉛で年間數十頭のマッコウクジラを捕る、そしてそれを食べるだけなく、山の民から米や野菜を得るための「貨幣」として使っているという話に興味がわき、ぼくは、すでにこのとき一年以上一緒に旅をしていた妻とともにこの村までやってきたのだ。

バリ島からその東のフローレス島まで飛行機で一時間少々、そこから乗り合いバス四時間、船四時間という行程を経て、さらに東にあるレンバタ島へ渡った。バスや船が一日に何回も出ているわけではないため、それだけの移動に結局足かけ三日かかった。そしてレンバタ島で船を降りてから目的の村、ラマレラまでは、非常に険しい道なき道を、乗り合いトラ

ックでざらにまた四時間ほど行かなければならなかつた。

ガツンガツンと激しく揺れ、土ほこりに包まれたトラックの荷台に乗つて山を越え、島の反対側へと降りていくと、目の前には深い青色の海が広がり、気がつくと周囲にボツリボツリと家が見え始めた。そして人家の前にゴロゴロしている白い大きな物体が何なのかを知ったとき、そこがラマレラだということがすぐ分かつた。すなわちそれは、オブジエのように置かれていたクジラやイルカの骨だつたのだ。

電気も通つていなく、ほとんど現代文明の流れとは無関係のままでいる小さな村は、しかし決して貧しいという印象を与えるところではなかつた。他の世界の激しい変化と競争に巻き込まれることなく、周囲の豊饒な海とともに生きる独自の豊かさを彼らが持ち合わせていることは、ラマレラにしばらく滞在しているうちに、なんとなく感じられるようになつた。

男は海へ、女は山へ。すなわち、男が獲物を捕りに海へ漕ぎ出し、女はその獲

物を米や野菜と交換するために山の民のもとへと通う。その確固たる生き方を、村人たちは信じ、何百年という間ひたむきに繰り返してきた。

「一番辛いときは、獲物が捕れないときだ」

そう言つたのは、すでに六十九歳でありながら現役でクジラを捕り続けるゴリス・タポンという男だつた。彼は「ラマファ」と呼ばれる銛撃としてその当時まだ船に乗つていた。これ以上ないほど明快な彼のその言葉が、まさにこの村の男たちの強靭で一途な生き様を表しているように思えた。

そんなラマレラに着いてから六日目のこと。ぼくは彼らの「至福の瞬間」を見るために、浅黒い肌の寡黙な男たちとともに小船に乗つた。

しかし、彼らが海の巨大な動物を捕ら

える瞬間に実際に立ち会える可能性が高くなることは覚悟していた。というのも、その前の五日間で実際に捕れた獲物はマント一匹ぐらいであり、クジラはその姿すらも現していなかつたのだ。

イルカの大群と遭遇

漂う木船の中で、ふと一人の男がぼくに向かって口元に手を持っていく動作をした。そして無言で

「タバコを持つていなかつた？」

と聞いてくる。ぼくは数日前に買ったタバコを持っていることを思い出し、黙つて彼らに配りだす。男たちも何も言わずに箱から一本ずつ取り出していく。そしてちょっととぼくに笑顔を見せた。

「おまえは吸わないのか？」

そんなそぶりを見せた一人の男に向かって、ぼくは軽く首を振つた。そもそもぼくはタバコは吸わない。それなのにはくがタバコを持っていたのは、インドネシアではタバコをあげることがコミュニ

●こんどう・ゆうき

一九七六年東京都生まれ。東京大学大学院工学系研究科修了。(二〇〇三年よりアジア・オセアニア各地を訪れ、人物や社会のルポを執筆する。現在は中国・上海在住。

ブログ「From 2003」<http://bloggers.ja.bz/yukon>

ケーションに繋がるため、何箱かバッグに入れていたからである。しかしそのとき断つた理由は、ただ吸わないということがだけではなかつた。すでにひどい船酔いに襲われていて、それどころではなかつたのだ。

船が動いているときはまだ良かつたが、エンジンを止めて漂い始めたころから酔いは急激にひどくなつた。ぼくはとにかく、目を閉じたり、周囲に見える水平線に目をやつたり、また体内からこみ上げてくるものを必死に押し込んだ。それを何度も飲み込んだりを繰り返した。その吐き気は、周りから漂つてくるタバコの煙によってさらに増幅されることになり、ぼくはタバコを配つたことをすぐにく悔する。

しかしそうして二〇分も四〇分もするうちに、吐き気はかろうじて遠ざかり、今度は睡魔が襲つてきた。船酔いのピーコを通り過ぎて気分が和らいだこともあり、ぼくはその睡魔にまかせて今度はしばらく目をつぶつた……。

おそらく十五分ほど経つていただろう。船内の沈黙が突然破れ、エンジン音が聞こえ始めた。すぐに目を見開くと、そこにはまだ何も見えていない。そのときぼくにはまだ何も見えない

かったが、さらに、一頭か、一頭かと数字で聞くと、真剣な表情のその男がこのときだけこっちを向いて、静かに答えた。「大群だ！」

木船はますます速度を上げた。船首が上向きになつたうえに、横から大きな波が打ち寄せるため、船はきわどいバランスを保つているものの何度も転覆しそうになつた。断続的に大きな波と飛沫が船内を襲い、誰もが全身びしょぬれになる。ぼくはバッグの中からカメラを出した。この波が一回でもかかつたとすれば、も

講座案内

『功名が辻』 を読み解く 話題の

司馬遼太郎の時代小説『梶の城』『国盗り物語』『夏草の賦』などを、比較文学の手法や比較文明学の視点で読み解き、『功名が辻』が司馬史観を解く重要な鍵であることを解説する。

●講義内容

I 『梶の城』他初期作品から司馬の「辺境」へのまなざしの意味とその重要性に迫る。

II 『国盗り物語』と『史記』司馬の英雄史觀と司馬遷の「史記」を比較する。

III 『功名が辻』を読む 「競争社会」の負も描いた『功名が辻』の新史觀を読み解く。

IV 『夏草の賦』~『竜馬がゆく』これらとの作品から新しい歴史觀の展開を考察する。

講師=高橋誠一郎
東海大学外国语教育センター
教授・比較文明学会理事
5月10日から 全4回(毎水曜日)
会場=高輪キャンパス
時間=13:30~15:00
受講料=8,000円 定員=30名

講師と歩く 歴史散策

国会議事堂内の参議院・法務省
旧本館内の法務資料展示室など
※場合により変更することがあります。

講師=吉見 周子
(吉見女性史研究会主幹)
7月4日(火曜日)13:00~15:30
受講料=2,000円
定員=30名

【お問い合わせ】
学校法人 東海大学
エクステンションセンター
TEL:03-5793-7133
<http://ext.tokai.ac.jp/>

東海大学

ことだつたのだ。それは、イルカとともに暮らすという日々を送つてみたいと長年言つてゐた妻の希望によるものだつた。バンパリーでの毎日は、文字通りイルカとともにあつた。この町は、ビーチに野生のバンドウイルカがやつてくることで知られていて、多くの観光客がイルカを見るためにやつてくる。腰の辺りまで海に浸かって水中を眺める人間たちを見きむよるに、二メートル以上の巨体がゆっくりと優雅に泳いでいく。すぐに沖合に帰つていくイルカもいれば、何時間も人間の回りを泳ぎ続けるイルカもある。突然クルリと体を回して魚を捕まえたり、急に激しく動いてイルカ同士で遊び始め、人々を驚かすこともある。毎日、ビーチでそんなイルカたちを見ていると、いつ

ころんカメラが無事でいられるとは思えない。しかしそれは分かつていても、ここで撮らなければいつ撮るんだ、という思いの方が強かつた。カメラを片手に持ち、水がかからないようにその腕をできるだけ高く上げ、手当たり次第にシャッターを押す。そしてもう一方の手で船にしがみついた。揺れは大きく、何度か船から振り落とされるのではないかとヒヤッとした。

しかしその同じ船の先頭にいるラマファ、すなわち銛撃ちは、銛をかまえ、両



捕えたマンタを切る

足のみで舳先に立ち続けていた。

この漁は、銛とともにラマファ自身も海に飛び込むという危険かつ大胆なものだ。過去に漁物と銛とともに水中に引きずりこまれ、そのまま水面に上がってこられずに命を落としたラマファもいるという。彼らは体長十五メートル以上にもなるマツコウクジラをもその方法で捕る。それはまさに命を懸けた漁なのだ。

竹でできた銛の柄は、五メートルもある男たちが指し示す位置を見ながら、ラ

マファはじつと機会をうがつて、船の揺れを完全に吸収するように滑らかに膝を動かし、ほとんどバランスを崩さずに立ち続けるその姿には驚愕した。そんなラマファに見とれていたとき、横にいた男がぼくに言つた。

「見ろ、そこだ！」

そのとき船のすぐ前で、バサツバサツと音を立てながら小さな飛翔を繰り返している二頭のイルカの姿が見えた。リズムよく華麗に飛び必死に逃げ続けるその姿には、イルカが持つ天性の美しさのすべてが映し出されているようだつた。そして、グレーでつややかな肌の様子を見たとき、ぼくは、数ヶ月前までオーストラリアで毎日のよう見ていたイルカの姿を思い出さずにはいられなかつた。ストラリアでは東ティモールから陸路を越えてやってきたのだが、その後はオーストラリアにいた。オーストラリアでは安く買った中古のバンで大陸を縦断したりしていたものの、この国を訪れた一番の目的は、大陸南部のバンパリーという小さな町で野生のイルカに係わるボランティアをする

つた。

数時間に及ぶイルカとの闘い

しかし、それぞれのイルカの個性までが見えてくるようだつた。
ぼくたちボランティアの仕事は、イルカを見にやつてくる観光客の相手ぐらいなもので、その他の雑用を抜かせば、あとはほとんどイルカを見ているだけよかつた。それはイルカ好きにはたまらない日々に違ひなかつた。背びれについている傷などの特徴と名前を覚え、向こうも自分を分かつてくれるほどになつた日々は妻にとつて幸せなものだつた。イルカにはさほど興味がなかつたぼくも、半年もいるうちに自然に愛着と親近感を持つようになつていた。

そして、そんなバンパリーを離れて四ヵ月後、ぼくは、インドネシアで思わぬ形でイルカと再会することになつたのだ



砂浜に運びこまれたイルカ

ぼくは思わず息をのんだ。強い太陽の光の下にどこまでも続く深い濃紺色の海水の上は、一〇〇頭以上はいようかといふ

イルカで埋め尽くされていたのだ。

それは、一瞬夢かと思うような光景だつた。リュック・ベッソンのあの「グラ

ン・ブルー」のポスターと同じ風景がま

さに目の前にあつたのだ。光り輝く水面

で飛び跳ねる無数のイルカたちは、まるで海という果てしない舞台の上で踊つてゐるかのようだつた。そして、その光景がさらに不思議なものに見えたのは、今自分の乗つている船が、そんなイルカたちを追いかけ、鈴を撃ちこもうとしているためだつたのかもしれない。

オーストラリアでは、イルカは本当に愛され、大切にされていた。人々はイル

カを見るために、イルカとともに泳ぐた

めにお金を払つ。また、勝手に一定の距

離以上イルカに近づいてはいけないなど

という法律まであると聞いていた。それ

は、誰もがイルカを賞賛する世界だつた。

ぼく自身はオーストラリアのそんな空

氣に必ずしも好感ばかりを持っていたわ

けではないが、それでもボランティアを

半年以上もやり続けた後には、さすがに

イルカにそれなりの魅力を感じるようになつていていた。

そのイルカを、今は鈴を持つて追いか

けているのだ。ぼくはその事実がとて

つもなく不思議に思えた。しかし、この

船に乗つてゐる男たちにとっては、目の

前イルカを捕まえることこそが生きる

ために必要なことなのだ。

無数のイルカたちは、全力でぼくらの小船から離れようとする。みなほば一つの方向に逃げてゐるため、船はそのまま方向へ向けてエンジン音を高めていく。

イルカがいよいよ射程距離に入つてくると、船内前方にいる二人の男が、声と手振りでラマファにイルカの位置を伝え始めた。視界が一番広いのはもちろん舳先に立つてゐるラマファのはずなのだが、自分の身長の優に二倍以上ある鈴を両手で支えながら激しく揺れる舳先に足だけ

で立つたためには、おそらく予想以上の集中力と体力がいるのに違いない。そのため広大な海原を見渡す余裕がないのか、

後ろの男に、「そこだ!」「あっちだ!」といわれるのにあわせて、彼は鈴とともにゆっくりと体の方向を変えているようだつた。ラマファが見ることができる範囲は決して広くはないのだ。

そしてついにチャンスがやつてきた。一頭のイルカとの距離が数メートルもないほどに縮まつたのだ。ラマファの、舳先にしっかりと張り付いた足と、鈴を抱える腕は小刻みに震えていた。その震え

マニアの姿だけだつた。逃がしたのだ。それから、ぼくの後ろに座つてゐた男も海に飛び込み、投げ出されたまま浮かんでいた竹製の鈴の柄を拾いにいった。

二人とも悔しそうに船に上がりつたが、水の滴る衣服のまますぐにもの配置に戻り、船は速度を上げた。船はまた大きく揺れ、水しぶきをあげ、波と激しくぶつかり続ける。一度広がつたイルカとの距離は、また少しづつ縮まつていった。

「今度こそ!」

男たちの筋肉の動く音がひとつひとつ聞こえそそなほど力のこもつた空気が船の上に広がつた。彼らの意識のすべてが

いま、前方を懸命に逃げるイルカたちに向けられていることは間違ひなかつた。

それはまさに戦いだつた。決して技術

はおそらく船の振動によるものだけではなく、ラマファ自身の気持ちの高ぶりを示していたようと思えた。

「さあ、飛ぶぞ! いま、捕まえるぞ!」

赤いTシャツに覆われたラマファの背中は無言にそう語つてゐた。船内の男たちも一様にみな興奮しているようだつた。イルカがそのとき正確にどこにいたのか、ぼくが座る位置からは見えなかつた。水とエンジンの音にかき消されまいと大声で叫ぶ男たちの声を聞き、船が急に減速したことに気がつくと、すでにラマファは船の上にはいなかつた。ぼくが彼の姿を見つけたのは、少し離れた海面上の上だつた。獲物はどこにも見えず、見えたのはただこちらに向かつて泳いでくるラ

マニアの姿だけだつた。逃がしたのだ。それから、ぼくの後ろに座つてゐた男も海に飛び込み、投げ出されたまま浮かんでいた竹製の鈴の柄を拾いにいった。

二人とも悔しそうに船に上がりつたが、水の滴る衣服のまますぐにもの配置に戻り、船は速度を上げた。船はまた大きく

揺れ、水しぶきをあげ、波と激しくぶつかり続ける。一度広がつたイルカとの距離は、また少しづつ縮まつていった。

「今度こそ!」

男たちの筋肉の動く音がひとつひとつ聞こえそそなほど力のこもつた空気が船の上に広がつた。彼らの意識のすべてが

いま、前方を懸命に逃げるイルカたちに向けられていることは間違ひなかつた。

それはまさに戦いだつた。決して技術

 SHIBUYA
TOBU HOTEL

渋谷東武ホテルの パーティープラン



お一人様
6,000円より
(税・サービス込み)
120分

フリードリンク付
ビール・ウィスキー・ウーロン・ジュース

(プラス500円で焼酎・日本酒・
ワインも飲み放題になります)

●歓送迎会、同窓会、OB会など各種のお集まりにご利用ください。

 渋谷東武ホテル

〒150-0042
東京都渋谷区宇田川町3番1号
渋谷駅より徒歩6分 公園通り沿い

▶お問い合わせ 憧れ宴会予約まで
03-3476-0707
<http://www.tobuhotel.co.jp/shibuya/>

た。数頭のイルカが目の前をさつと横切らうとした瞬間、ラマファアは鉛と一緒に水中に消えていった。そして船の中が瞬間に歓喜にわいたとき、船から長く伸びた鉛綱の先では、横腹に鉛が刺さったイルカが最後の力を振り絞るようにもがいていた……。

それからさらに数時間後。小船は中に一頭のイルカを横たえて砂浜へ戻っていった。朝その浜を発つてから五時間以上の中に捕れたのは、その一頭のみ。しかもその日海に出た四隻の船の中で、獲物を捕つて戻ってきたのは、ぼくが乗つた船のみだった。船を降りると、船酔いを恐れて船には乗らなかつた妻が砂浜に来ていた。ぼくが興奮しながらその一部始終を話すと、イルカ好きの彼女もまた、その男たちの命を懸けた戦いを見てみたかった、と言つた。

再び至福のときがくるか

六十九歳の現役ラマファアであるゴリスに会つたのは、この日の夕方、日差しも少し傾きかけていたころのことだった。

ことばの散歩道

ジャーナリスト

榎原昭二

74

「色はいろいろ」

二月二十五日の読売新聞、連載歌句

評釈エッセイ「四季」欄で、俳人の長谷川櫂氏は、例句をあげて、薔薇色について説明している。

「薔薇色の暁して日あり浮冰

鈴木花菴

薔薇の花の色はいろいろだが、薔薇色といえは淡紅。ロゼ・ワインの色

時々、見る福田邦夫氏の「色の名前」（主婦の友社）を取り出した。この本は三百九十一色の色見本を示しビンク系、赤系……以下オレンジ、茶、黄、緑、青、紫、白・灰・黒の九系に分類、それぞれに解説をほどこしている。日本では、バラ色、サクラ色となる。花の名前の中には色をつけたものが多い

のが特色で、キツネ色、ネズミ色など動物の名前を借りていいものは少ないとのことだ。

バラ色の話にもどる。英語では最初、ローズはレッドとピンクの両方の色を表していた。つまり赤からピンクにかけての幅広い色調をすべてローズと言っていたようだ。後世、ローズとローズレッド、ローズピンクとに分かれた。

この本にはローズレッド、ローズピンクのページがある、花の色からとられた英語の色名としては最古らしい。詩人ホメロスは、朝焼けの空を「バラの花は桜木。サクラ色をのぞいて見た。花は桜木。サクラ色をのぞいて見た。花の色はいろいろ」と形容した。

英語の色名のチエリーは、サクランボの赤い色をさすことになってしまった。花の色のピンクとは別の色のことだからご注意。チエホフの、お芝居の最高傑作とされる『桜の園』は実はサクランボの園なのだ。

植物名が色名になつたものとしては、茜色（あかね色）、杏色（あずき色）、卵の花色（雪かとまがう白さ）、葡萄色（山ブドウは古くは「エビカズラ」と呼んだ）、柿色（むしろオレンジ色）、桔梗色（青紫）、蘇芳色（あわぎ）、蘇芳（蘇方とも書く）、紅色（紅花からとられた赤色）。色名は特定の色を指示するものではなく、ある範囲の色の印象を表わすもの。なるほど、色はいろいろ。

村のリーダー的存在であり、英語を話すマテウスという男がその手配と通訳を買って出てくれ、ぼくらは彼の家で会うことになった。

地面がむき出しどなつた彼の家は、薄暗く質素な作りであつたが、ところどころに見える色彩豊かなキリスト教の装飾が印象に残つた。そこでしばらく待ついると、ゴリスが姿を現わした。見ると、それは別の日に砂浜で黙々とマンタを切つていた精悍な容貌の男だった。

午前中の経験を思い出しながら彼にいでもつとも印象に残る出来事は何だったかと訊ねた。「六年前のことだ」ゴリスは迷うことなくそう答えた。一日に五匹ものマンタが捕れたことがあつたのだと、その日を思い出すように語つてくれた。おそらくそれが彼の至福の時だったのだ。

「しかし」と、ゴリスの言葉を訊し終えたマテウスが付け足した。

「最近はあまり獲物が捕れなくなつてしまつたのだ。おそらくそれが彼の至福の時だったのだ。

「しかし」

ゴリスは迷うことなくそう答えた。一日に五匹ものマンタが捕れたことがあつたのだと、その日を思い出すように語つてくれた。おそらくそれが彼の至福の時だったのだ。

「しかし」

まったくの一週間ほどの滞在中に捕獲量も減っています」

五年前は一年間で四十九頭のマッコウクジラが捕れたが、去年は二十三頭だけだつたという。「二十三頭でも一応十分ではあるようだが、捕獲数が減っていることは気にかかる。

ぼくたちの一週間ほどの滞在中に捕獲されたのも、結局イルカ二頭とマンタ一匹だけだつた。そしてそのときすでに、最後にクジラが捕れた日から一ヶ月以上が経つていた。

クジラが捕れたが、去年は二十三頭だけだつたという。二十三頭でも一応十分ではあるようだが、捕獲数が減っていることは気にかかる。

ぼくたちはその像に見守られながら、ただ毎日、今日こそはクジラと願い、この島に根付くキリストへ、日々、祈りを捧げることぐらいなのかもしれない。

砂浜の小さな祠の中には、右手に鉛を持った宣教師らしき人物の像が建つている。男たちはその像に見守られながら、ただ毎日、今日こそはクジラと願い、海を眺め、噴き出していく。

（取材期間：一二〇〇四年七月）

